

「鞠智城選地論」覚書

木崎康弘

1. はじめに

「このような事情から、筆者は白村江敗戦後の大和朝廷が西日本有数の大豪族で朝鮮半島の情勢にも通じた火君一族の動向に神経をとがらせていたのではないかと想像している。そこで、第二の磐井の叛乱に備えて、火君を牽制する意味で、肥後北部の穀倉地帯の中央に鞠智城を築いたとは考えられないだろうか」

鞠智城の築城に関する議論の中で、取り上げられることの少ない主張なのだが、実に興味深い。文中の「筆者」とは、肥後考古学会会長の富田紘一（以下敬称を略す）。「熊本県〔菊池地区〕鞠智城 119」（富田 1979）をこう締め括ったのだった。

この見解に対して、「羅針盤として、その方向を指示していた」と評価したのが、長洋一だった（長 1991）。百濟との交流を行っていた火（肥）国の勢力が、百濟滅亡後に、「大陸文化受容の窓口」を「新羅に求めないとは言い切れなかった」と提起。そして、「中央集権化をめざす中央権力は、かつては火君などのもつ二面性の性格を巧みに利用していただけに、政策転換後においてはことさらに警戒しそのよう動きを牽制しようと考へたのではなかろうか」と続けた。そして、こう結論付けたのだった。「火君の根拠地に接する鞠智城の造営はそのような意図に合致する条件をもっている」と。

ところで、筆者は、鞠智城跡と係わって9年目になるが、その当初、直線距離で、鞠智城が大宰府から約63km、菊池川の河口から約27kmの、内陸にあることの意味を自問した。それはまた、鞠智城跡に係った、これまでの考古学者や歴史学者の多くが掛け続けてきた自問でもあっただろうが、そんな自問の中で、「磐井の乱」というキーワードが脳裏に浮かんだのだった。そして冒頭の議論に触れ、イメージはさらに大きなものになっていった。

本論は、こうした自問の延長線上にあって、ヤマト王権が鞠智城を築城するに当たって彼の地、彼の城に求めた役割の歴史的背景を「磐井の乱」に求める意図して起稿するものである。

2. 役割についての議論について

（1）議論の中身とその認識

まず、ヤマト王権が鞠智城に求めた役割についての議論（以下「役割論」という）を整理しておこう。

鞠智城の科学的な調査研究の開始は昭和に入ってからのことであったが、すでに1911年に発行された、山崎直方・佐藤傳藏編著の『大日本地誌』8の中で鞠智城が取り上げられた。「文武天皇二年、^(ママ)太宰府に勅し、^(ママ)大野（前に出づ）^(ママ)基（肥前国三養基郡基山）^(ママ)鞠^(ママ)地（肥後国菊池郡）の三城を修めしめ、（中略）以て外警に備ふるなり」だ。ここで早くも「外警に備ふる」との議論が行われた。

本格的な役割論の嚆矢は、坂本經堯だ。『地歴研究』に寄せた論文、「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就いて」の中で、大野城や基肄城などと同様の「百濟式山城」として、「外敵の入寇に備えて」築城された、と書いた。年代については、天智天皇9年の670年を想定。「この頃は水城をはじめ大野、基肄、金田などの第一線諸城既になって国防は第二期に入り、長門の豊浦、讃岐の屋島、倭の高安など防禦の深さを益した頃」と記した。また、文武天皇2年の698年の繕治は、「其の年薩摩の隼人が反し、天平の頃まで薩摩に班田行はれざる状態」だったことを背景に、「九州の天地は外寇の外は内治上にも風雲急なるものがあった」からだとした。そして鞠智城には、

a 「有明海方面より侵入した外敵に備へ、同方面の異変を防烽の制によって大宰府に中継する」^{トプヒ}

b 「豊饒なる肥後の物資、兵器を蓄へ大宰府の非常に備へる」

c 「九州南部に蟠居して叛服常なき熊襲族に対して重鎮とした」

の役割が付与された、と考えたのだった（坂本 1937）。研究初期の予見的仮説ではあったのだが、高い先見性から、鞠智城研究の原点と位置付けられる所以である。

ところで、本論の本旨は、築城に当たってヤマト王権が求めた役割、築城時の役割論を中心に据えて議論を進めることにある。ただし、研究史の俯瞰にあたっては、ベースにする坂本の議論が築城時と繕治時を明確に峻別したものになっていない点、議論の全体を明らかにすることが必要であると認識している点の 2 点から、築城時と繕治時の役割論を併せて整理することとした。

i . a の観点での役割論

a は、奥まった内陸に築かれたことの意味を問う議論で、築城時の役割論である。発言者には、乙益重隆、小田富士雄、西谷正、濱田耕策、笹山晴生、佐藤信、能登原孝道がいる。

乙益は、「築営の主目的が外敵対策にあったことは、『日本書紀』や『続日本紀』の記事からも明らか」と念を押した。そして「おそらくそれは、西方の有明海・八代海方面から侵入する外敵対策が考慮されたのであろう」と主張した（乙益 1985）。

小田は、朝鮮式山城の一つであるとの立場を示し、「有明海から侵入する外敵を防ぐ目的を第一とするもの」と主張した。また、「低位山城として西側が平野につづく構造をとる占地から、単なる防衛に終始するのみならず、時として攻撃して出る機能をも考慮されていた」との認識も示した（小田 1993）。

西谷は、2007 年に菊池川流域古代文化研究会で行った講演の中で、有明海を進入した唐・新羅連合軍を逸早く捉え、その情報を大宰府に送るとともに、連合軍を背後から討つという積極的な機能を想定した。また、大宰府の、北の護りの金田城に対する南の護りという位置付け、との認識を示した（西谷 2007）。

濱田は、2009 年鞠智城東京シンポジウム（以下「鞠智城東京」を省略）で行った発表の中で、匂わす発言をした。「鞠智城の地が大宰府防衛網の拠点の一つに選定されたのは、朝鮮半島西部から有明海に至る文物渡来の歴史が、この地域にも前史として確かにあったから」との発言だ（濱田 2010）。

笹山は、2010 年鞠智城東京シンポジウムⅡ（以下「鞠智城東京」を省略）で行った講演の中で、「まさしく大野城・基肄城などと共に朝鮮式山城としての特徴を備えており、大野城・基肄城とほぼ同時期に、共通の目的を持って建設された山城」との議論を行った。そして目的を「最も南に位置することから見て、おそらく有明海方面からの進攻に備える」ためだったとした（笹山 2011）。

佐藤は、2010 年シンポジウムⅡで行った発表の中で、次のように発言をした。「大宰府を護るために施設として、水城が有名ですが、南側にも水城が築かれたということもあります。基肄城や大宰府東南で最近発見された阿志岐山城も含めて、南に対する護りというのも行っているのであります。私は、海外に向かって開かれた有明海をもっと注目してよい」と（佐藤 2011）。直接的な表現ではないが、a の観点だろう。

能登原は、「鞠智城 I・II 期においては、対外危機等に対応するための防衛拠点（城）としての機能」との議論を行った。これは、「城門、土壘の整備によって城の防備が固められるとともに、貯水池及び八角形建物をはじめとする各種建物の設置」など、「防衛拠点（城）としての機能を主体的にもっており、そのための様々な整備、及び内部構造の充実化が図られた」との考古学的認識からだった。また、最大の特徴は、繕治の評価だろう。「大野城、基肄城と一緒に繕治（修理）されたことは、古代山城のネットワークの中で、城としての機能の充実を図り、古代山城による防衛網をより強化する意味」とした（能登原 2014）。

ii . b の観点での役割論

b は、内陸に築かれた地理的位置と、炭化米が大量に出土した考古学的事実を関連付けた議論で、築城時

と繕治期の役割論である。発言者には、鏡山猛、島津義昭、木村龍生、能登原孝道がいる。

鏡山は、古代山城を4つに分類した。「大宰府周辺の囲郭一大野城・基肄城・水城」、「博多方面の遺跡不明の城一大津城外」、「前線基地一対馬金田城と後背地一肥後鞠智城」、「瀬戸内海方面の要地一長門城・屋島城・讃岐城山」。そして、「以上が大宰府建設当初に築造、または補修されたものである。その配置から外敵を予想して営まれた」と議論した。これは、金田城の対極の位置にある「後背地」の城という認識で、「外敵を予想して」後背地に「営まれた」城という理解だろう。また、1961年には、「大野城、基肄城のよう高峰の上に土壘をめぐらすのではなく、東辺及び南辺は丘陵性の尾根を土壘が走っている。城内に入るために急坂を登る必要がない」点を以て、「戦略的な意味よりも、軍略的な意味が強かった」との認識を示した（鏡山 1967）。具体的な例示はなかったが、「この地は肥後の北部隈府平野にのぞみ、北九州の防衛の見地からは奥まりすぎた感じ」との文脈から、bの観点に通じる議論⁽¹⁾だとみられている（島津 1983、甲元 2006）。

島津は、鏡山の「軍略的な意味」を評価した。そして、「建物の周囲の数カ所から炭化米が出土していることは、この城が食料備蓄的な性格を持つものであることを良く示している」と議論した（島津 1983）。

木村は、「交通の要衝かつ穀倉地帯であった菊鹿盆地を抑え、物資を貯蓄し、必要に応じて大宰府あるいは肥後国府などへ、その物資を運搬することであったとするのが最も現実的」との議論を展開した⁽²⁾（木村 2014）。

能登原は、「稻穀などの貯蔵・保管施設（倉庫群）が鞠智城IV期」に新たに建てられたことについて、「鞠智城IV期になって稻穀などの貯蔵・保管施設という新たな機能」を持ったと評価⁽³⁾（能登原 2014）。IV期に「鞠智城の防備の点において重要な門であった」池ノ尾門が維持管理されなくなったことを踏まえた議論だった。

iii . c の観点での役割論

cは、繕治記事に関する議論で、繕治時の役割論だ。乙益重隆、西住欣一郎、岡田茂弘、甲元真之、濱田耕策、佐藤信がいる。この中で、岡田と他者とでは、認識に大きな開きがあり、同列には扱えない。

岡田は、2004年（国史跡指定記念）と2009年のシンポジウムの中で、東北の城柵との地形的な共通性、類似性を踏まえた発言を行った。それは、白村江の戦い直後の防衛というよりも、国内事情で、律令国家の中での九州の掌握を視野に入れた築造であり、改修であり、南九州での不測の事態に備えた、との議論だ（岡田 2005、2010）。

一方、乙益は、「大宝2年（702）以来、たびたび叛乱をくりかえした、南九州の隼人対策も考慮されたのではなかろうか」との認識をした（乙益 1985）。

西住は、築城期と繕治期以後とではその主となる機能が異なると考えた。そして、繕治期以降は、南九州を背後より統括するようになったと想定し、隼人対策を視野に入れた議論を展開した（西住 1999）。

甲元は、8世紀前半以降、南九州の動乱に備える機能を果たしたと想定した（甲元 2006）。

西谷は、2010年シンポジウムの中で、次のような議論を行った。「8世紀以後、律令体制による国家の安定化に伴って、大宰府の西海道・南島に対する内政の南方拠点として重要視されていった」と（西谷 2011）。

濱田は、2010年シンポジウムの中で、「この大宰府に連なる三城のなかで、鞠智城はその南方に位置している。その立地から判断すれば、この城が「繕治」されたことは、奄美等の南方勢力に向けられた倭国政権の慰撫策に対応する政策であることが読み取れる」と発言した。また、「この隼人の抵抗には大宰府を拠点として鎮圧軍が組織されるが、（中略）大宰府から南に向かう最大の山城として、鞠智城は隼人の反乱に向かう基地としても機能した」とも述べた（濱田 2011）。

佐藤は、「白村江の敗戦後の国際的緊張のもとで対外的な防備の機能を鞠智城が果たしたことは当然であろうが、一方南方の対隼人政策との関係で鞠智城が機能を発揮することも、あり得ることと考える。(中略)薩摩における対隼人戦に兵士・軍糧を送り込む際に、上述した大宰府から薩摩国に至る交通ルート上の鞠智城が、大宰府の前進基地としての機能を果たすこと、十分推定される」との議論を行った(佐藤2014)。

そして、熊本県教育委員会の公式の認識は、次のとおりだ。鞠智城Ⅱ期の役割として「国内的課題である南九州の隼人対策」を与えたというもの(熊本県教育委員会2012)。

iv. その他の議論

i～iii以外の観点での議論もあった。

一つ目は、大宰府から63kmも離れた地理的位置を最大限に評価する観点での議論だ。

向井一雄は、註釈ではあったが、次のようにコメントした。「隼人対策などの国内的な築城目的を考える意見も多いが、筑肥山地を第2の防衛線とする構想を想定できるのではないだろうか。鞠智城は大宰府陥落後の九州内の拠点として用意されたとみておきたい」と(向井1991)。根拠の明記は無いが、他の山城には見られない、広い平坦面を擁する地形的な特徴を重視した議論だろう。

この議論との同調が、西住欣一郎だった。西住は、大宰府陥落後の控えの拠点として、鞠智城が設定されていたと考えた(西住1999)。また、共通する議論は、甲元眞之だった。「兵站基地」論に異を唱え、「齊明期に朝倉宮が陥落した場合の行宮として構想された」というもので、鞠智城跡の政庁的な遺構配置(60～63号掘立柱建物跡)⁽⁴⁾を評価した議論だった。その後は、7世紀末に改築されて山城の役割が付与され、8世紀前半以降はiiiで前記したとおりの役割になったという(甲元2006)。

二つ目は、小田富士雄の議論だ。縫治期以降の役割として、「大野・基肄・鞠智3城は9世紀代まで周辺地域の治安警備の機能を果たしていたであろう」と推論した(小田1993)。

三つ目は、木村龍生だ。それは、縫治期以降の役割として、「鞠智城Ⅱ期段階には、律令制導入のための肥後北部の拠点として大宰府による改修で政庁的施設等が付与され、従来の役割であった物資の貯蓄と共に官衙的役割を果たすようになった」というものだった(木村2014)。

四つ目は、冒頭に取り上げた富田紘一(富田1979)と長洋一(長1991)の議論だ。

(2) 役割論2種—遷移役割論と一貫役割論—

鞠智城は、築城から縫治(698年)を経て、「菊池城院の兵庫の戸自ら鳴る」(879年)までと永く維持管理されてきた城砦施設である。その間は、白村江敗戦から律令国家成立を経て、平安時代前期までと、歴史的にも極めて重要な時代であった。従って、役割論では、一貫した役割論(以下「一貫役割論」という)が僅かに見られるものの、歴史の動きを反映させた遷移での役割論(以下「遷移役割論」)が目立っている。ここでは、(1)の議論内容を整理する意味で、それぞれの学者の通時的な認識を見てみたい。

遷移役割論の認識では、白村江敗戦(663年)と隼人の反乱(720年)の年代から、a→cが基本であった。坂本經堯の認識では、遷移の記述は見出せないが、「其の年薩摩の隼人が反し」が併記されており、a+b→c+bと理解されていたはずだ。乙益重隆や西谷正、佐藤信、濱田耕策も同じようにa→cだ。この中で、西谷と濱田は、「南島」「奄美等」を睨んだ役割にまで広げて解釈しようとした。能登原孝道も遷移だが、乙益らとは異なり、a→bだった。

遷移役割論では、小田富士雄、向井一雄、西住欣一郎、甲元眞之、木村龍生もあった。小田は、aの役割から、周辺地域の治安警備に遷移したとの理解だ。向井は、「大宰府陥落後の九州内の拠点」の後、「緊急時の食糧備蓄基地に変貌」と議論した。言わば、bの役割への遷移というものだった。初期の役割では向井の認識と共に通していた西住だが、次の段階の役割では異なっていた。それは、cの役割への遷移だった。甲元は、齊明期、朝倉宮陥落の時の行宮だった、と主張。その後、「鞠智城」として改築(縫治か)され、8世紀以降は、cの

役割となったと考えた。木村は、bの役割が基本だったが、鞠智城II期に官衙的な役割が加味されたと考えた。

これらに対して、一貫役割論を主張したのが岡田茂弘だった。前記したので、詳細には繰り返さないが、役割は、築城以降、一貫して、西海道の掌握と考えた。他のどの考古学者や歴史学者にもみられなかった観点だが、鞠智城と東北の城柵の近似性を基本に据えた、傾聴に値する議論だ。

3. 築城記事無記載の意味するもの

(1) 役割論と築城記事問題

鞠智城研究の嚆矢、坂本經堯は、「外敵の入寇に備えて」を前提とした築城時の役割論を展開した。ところが、その前提となるべきはずの築城記事は、『日本書紀』のどこにも明記されていなかった。これは当時も現在も変わらない状況だ。これでは白村江敗戦に伴う対外防衛と鞠智城の築城をシリアルな関係で結ぶことはできないはず。それでも敢えて、繕治記事を根拠にして鞠智城を「百濟式山城」と見なし、直接的（a）、間接的（b）な対外防衛としての役割を想定したのが、坂本の議論だった。

そんな坂本も、検討を試みた節があった。それを窺わせるのが、「鞠智城が築城されたのは天智天皇の九年の様である」の一文だ。築城をそのように言った根拠がどこにあったのかは、引用等がなくて分からぬのだが、『日本書紀』天智天皇 9 (670) 年 2 月条の「(前略) 又築長門城一・筑紫城二。」だった可能性はある。ところが、それはあくまでも「筑紫城二」であって、火（肥）国の鞠智城を当てるのには、別の議論が必要となる。そのためか、敢えて「築城の時期は鞠智城の使命を考うる上に極めて重要である」と付記した坂本の文脈には、当てはめてみたものの確信までは至っていない、そんな気持ちが滲みでているようである。

また、別の議論でこの記事を取り上げたのが小田富士雄である。小田は、『日本古典文学大系 68 日本書紀（下）』の補注 27-4 「天智紀の重出記事」を引き合いに、鞠智城が大野城や基肄城、長門城と一緒に築城された可能性を否定した（小田 2012）。この記事が天智天皇 4 (665) 年 8 月条との重出ならば、両方とも書き落としてない限り、どちらかには築城記事が載っているはず、という趣旨だろう。従って、「天智天皇 4 (665) 年 8 月（『日本書紀』）には見えないので、当然この 2 城よりややおくれて創設された」と考えたわけだ。

こうみると、築城の事実は、もともと『日本書紀』に記されなかった、と考える方が的確なのではないだろうか。そこで問題となるのが、築城が記されなかった理由だろう。仮に鞠智城が大野城や基肄城などと同じように対外防衛の拠点だったならば、なぜ築城の事実が記されなかったのだろうか。この点にもう一度立ち戻って、議論をする必要がありはしないだろうか。

(2) 古代山城の分布

かつて、朝鮮式山城と神籠石系山城という区分けで古代山城が理解されていた。それは、神籠石系山城の神域説対山城説との論争継続段階では有効だっただろうが、山城説に軍配が上がった現在ではほとんど実効性を失っている。従って、すべて古代山城として認識されている今日の状況は、実に明快だ。ただし、その中で、抜け落ちている観点もある。『日本書紀』に、なぜ築城記事が記された城があって、記されていない城があったかだ。

『日本書紀』に築城記事の記載のある古代山城（以下「記載山城」という）の位置（第 1 図）を見て



第 1 図 築城記事記載山城分布図

みよう。

・天智天皇 4 (665) 年 8 月条：
「(前略) 築城於長門国。(中略) 於筑紫国築大野及櫟二城。」

・天智天皇 6 (667) 年 11 月条：
「(前略) 築倭国高安城・讃吉国山田郡屋嶋城・対馬国金田城。」

665 年、最初に築城された長門城、大野城、基肄（櫟）城は、瀬戸内海を塞ぐ関門海峡⁽⁵⁾と、対

外防衛拠点の大宰府⁽⁶⁾を望む土地に置かれた。667 年築城の高安城、屋嶋城、金田城は、ヤマト王権中枢部の前面、目前にした播磨灘の入口、そして最前線の対馬に置かれた。それは、ヤマト王権の中枢部を唐・新羅連合軍の来襲、外患から護るために、西日本に配置された古代山城の防禦ライン（以下「西日本防禦ライン」という）であり、素人目でも、実に的確で、効果的な防禦体制のようだった。

『続日本紀』に修繕・停止の記事はあるが、築城記事の無い古代山城（以下「無記載山城」という）がある。

- ・文武天皇 2 (698) 年 5 月 25 日条：「令大宰府繕治（中略）鞠智三城。」
- ・文武天皇 3 (699) 年 12 月 4 日条：「令大宰府修三野・稻積二城。」
- ・養老 3 (719) 年 12 月 15 日条：「停備後国安那郡茨城・芦田郡常城。」

これらの中で、所在の明確なのは鞠智城だけである（第 2 図）。

記載そのものが無い古代山城がある。これも「無記載山城」としたい。それは、中国の石城山神籠石、鬼ノ城、大廻小廻山城、播磨城山城、四国の永納山城、讃岐城山城、九州の阿志岐城、雷山神籠石、女山神籠石、高良山神籠石、杷木神籠石、鹿毛馬神籠石、唐原山城、御所ヶ谷神籠石、おつぼ山神籠石、帶隈山神籠石である。

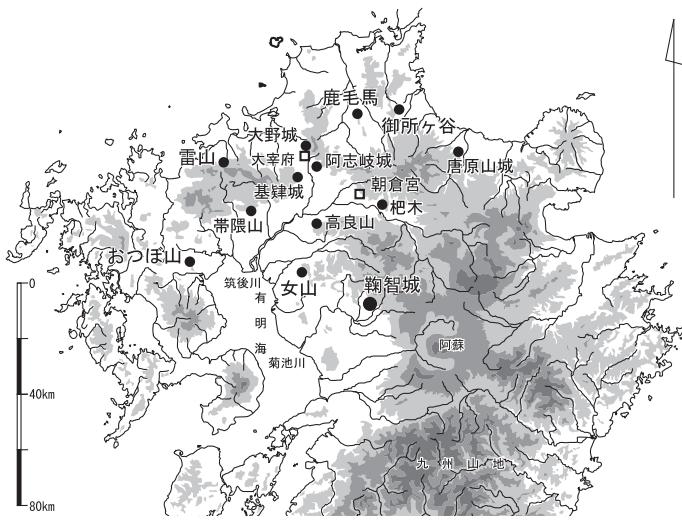
中国と四国では、多くは播磨灘への入り口である備讃瀬戸から播磨灘にかけて集まり、燧灘沿いと安芸灘の入り口にも 1 力所ずつあった（第 2 図）。備讃瀬戸から播磨灘にかけては、中国側に鬼ノ城、大廻小廻山城、播磨城山城が、四国側には讃岐城山城があった。備讃瀬戸を望む山城は、中国側の鬼ノ城、大廻小廻山城と、四国側の讃岐城山城だ。鬼ノ城、大廻小廻山城は、やや内陸にあるが、瀬戸内海を遠望できる丘陵に築かれ、播磨城山城は、備讃瀬戸を眼下に見下ろす丘陵上に築かれていた。燧灘に面しては永納山城があり、眼下にした丘陵上にあった。安芸灘の入り口には、石城山神籠石があった。海岸まで 8 km と近接し、瀬戸内海を望める山城だ。

これらの山城は、瀬戸内海を南北から挟むように、瀬戸内海に沿って線状に配置されていた（第 2 図）。

九州では、福岡県に 8ヶ所、佐賀県に 2ヶ所と、九州の北部に集中し、その多くが内陸に築かれていた（第 2 図・第 3 図）。仔細に見ると、おつぼ山神籠石～帶隈山神籠石～阿志岐城～杷木神籠石～高良山神籠石～女山神籠石と、筑後



第 2 図 築城無記事山城分布図



第 3 図 九州の古代山城の分布

川の中下流域を取り囲むように、U字形に配置された一群と、玄界灘に臨む雷山神籠石、遠賀川中流域の鹿毛馬神籠石、そして周防灘に面した御所ヶ谷神籠石、唐原山城神籠石に分かれそうだ（第3図）。その中で特に目立つ分布が筑後川流域の一群だろう。

筑後川流域の一群の中で、その最奥部にあるのが阿志岐城と杷木神籠石である（第3図）。その二つの山城を結ぶ線上に乗るのが、朝倉橋広庭宮があったとされる朝倉市周辺だ。比定地は未確定だが、筑後川流域の一群の役割を考える上で、重要だ。

（3）九州の無記載山城と石製表飾出土古墳

無記載山城は、律令制以前の国名で仕分けすると、筑紫国・阿志岐城、雷山・神籠石、女山・神籠石、高良山・神籠石、杷木・神籠石、鹿毛馬・神籠石、豊国・御所ヶ谷・神籠石、唐原山城、火(肥)国・おつぼ山・神籠石、帶隈山・神籠石、鞠智城となる。そしてそれらの国は、そのまま石製表飾出土古墳が分布する国(筑紫国が10ヶ所、豊国が3ヶ所、火(肥)国が18ヶ所で、他に日向1ヶ所)でもあった(第1表)。そこで、無記載山城と石製表飾出土古墳の関連性をイメージするために、両方の分布を同じ地図に落としてみた(第4図)。

まず、確認したのは、おつぼ山神籠石から女山神籠石までのU字形配置が、岩戸山古墳や石人山古墳などの八女古墳群や西原古墳、御塚古墳（第1表）を取り込んでいることだ。さらに、無記載山城の鞠智城にまで伸ばせば、石神山古墳、弥平山古墳、三ノ宮古墳、清原台地、山鹿市周辺の古墳、菊池市花房台地の古墳群、鞠智城近くの袈裟尾高塚古墳（第1表）と、さらに対象となる古墳が増えてくる。そこで、おつぼ山神籠石から女山神籠石を経て、鞠智城に至る古代山城までを、石製表飾出土古墳を囲繞するライン（以下「石製表飾出土古墳囲繞ライン」と

第1表 石製表飾出土古墳一覧（九州）

律令制 以前の国	古墳	墳形	所在市町	全長	石製表飾
筑紫国	石人山	前方後円墳	福岡県筑後市	120	石人（武装）
	石神山	前方後円墳	福岡県みやま市	54	石人（武装）
	岩戸山	前方後円墳	福岡県八女市	138	石人（武装・武装以外） 動物（馬・猪等） 器財（蓋・盾・靱・刀）
	伝・乗塙	前方後円墳	福岡県八女市	70	？
	伝・御塚	前方後円墳	福岡県久留米市	78	？
	童男山3号	円墳	福岡県八女市	16	石人（武装以外）
	童男山22号	円	福岡県八女市	16	石人（武装以外）
	豊福	？	福岡県八女市	？	石人（武装？）
	東光寺劍塚	前方後円墳	福岡県福岡市	75	？
	弥平山	？	福岡県大牟田市	？	器財（短甲）
豊国	臼塚	前方後円墳	大分県臼杵市	87	器財（短甲）
	下山	前方後円墳	大分県臼杵市	65	器財（短甲）
	天満2号	前方後円墳	大分県日田市	60	石人（武装？）
火(肥)国	西原	前方後円墳	佐賀県佐賀市	55	器財（蓋・盾）
	三ノ宮	前方後円墳	熊本県荒尾市	47	石人（武装）器財（蓋？）
	チブサン	前方後円墳	熊本県山鹿市	44	石人（武装以外）
	臼塚	円墳	熊本県山鹿市	29	石人（武装）
	フタツカサン	前方後円墳	熊本県菊池市	65	石人（武装）器財（蓋）
	木柑子高塚	前方後円墳	熊本県菊池市	？	石人（武装以外）
	袈裟尾高塚	円墳	熊本県菊池市	18	器財（靱）
	清原	？	熊本県和水町	？	器財（短甲？・家・椅子？）
	小野崎	？	熊本県菊池市	？	器財（舟？）
	富ノ尾	前方後円墳	熊本県熊本市	？	石人（武装以外）
	北原1号	円墳	熊本県熊本市	？	器財（盾）
	石之室	円墳	熊本県熊本市	30	器財（蓋）
	天堤	前方後円墳	熊本県氷川町	？	器財（蓋）
	姫ノ城	前方後円墳	熊本県氷川町	86	器財（蓋・盾・靱）
	中ノ城	前方後円墳	熊本県氷川町	102	器財（蓋）
	今城大塚	前方後円墳	熊本県御船町	42.5	不明
	八代大塚	前方後円墳	熊本県八代市	55.7	不明？
	竹島	円墳	熊本県上天草市	？	不明
(日向)	野地	？	宮崎県延岡市	？	石人（武装以外）

*『岩瀬・大井子遺跡』（熊本県教育委員会編、2001年）「第Ⅱ章総括」第2表を参照して作成



いう) と評価しよう (第 5 図)。

ところで、八女古墳群を代表する岩戸山古墳では、北東に隣接した平坦地から、他の古墳をはるかに凌ぐ数や種類の石製表飾（第1表）が見つかっている。その平坦地を『釈日本紀』巻13の『筑後風土記』逸文に記された「当東北角、有一別区」に当たると推定したのが、森貞次郎だった（森1956）。さらに同逸文記載の法量と岩戸山古墳の計測値とがほぼ一致することを論拠に、岩戸山古墳を「筑後国風土記曰。上妻県。県

南二里有筑紫君磐井之墓墳。」(『积日本紀』卷13)に比定し(前掲書)、現在これは、定説となっている。

また、小田富士雄は、石製表飾が筑紫国、豊国、火（肥）国に集中する傾向に対して、その背景に「筑紫連合政権」（小田 1991）があると歴史的に意味付けた。そして、磐井の乱（527 年～528 年）後に起きた「石人・石馬分布圏の衰退」を考古学的に証明できるとして、「磐井を盟主とする筑紫連合政権の崩壊を示すもの」（小田 1991）と踏み込んだ議論を行った。

ここに、石製表飾出土古墳を囲繞する無記載山城（第5図）の歴史的背景がわかるのではないだろうか。

(4) 無記載山城の築城年代

石製表飾出土古墳周縁ラインに朝倉橋広庭宮が乗り、しかもその最奥に位置していることは、あたかもその宮を護るシフトでもあるかのようで、その意味からも石製表飾出土古墳周縁ラインは、一体性を持っていたと考えられる。つまり、これらの山城は、同じ時期に築城されたものと考えられるのである。そこでまず、石製表飾出土古墳周縁ラインを構成する無記載山城の築城の年代について、考えてみたい。

ところで鞠智城の築城時期が時期区分の範囲の中で明らかにされるようになってきた（熊本県教育委員会2012）。それによると、築城期の「鞠智城Ⅰ期」は7世紀第3四半期～第4四半期に当たるという（第6図）。

つまり、築城時期は、7世

紀第3四半期（651年～675年）に絞られたこと

になる。それならば、一体

性を持つのではないかと考

えた石製表飾出土古墳囲繞

ラインの他の無記載山城も

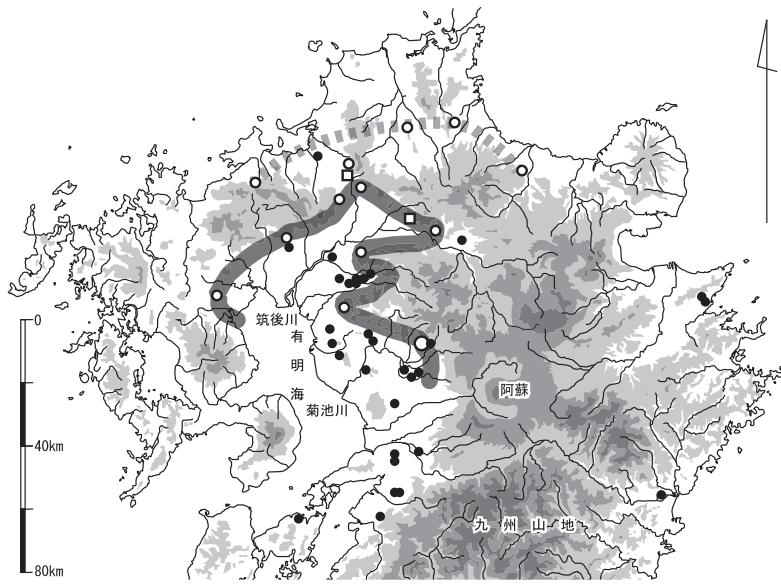
また、これと同じ時期に築

城されたのではないかとの

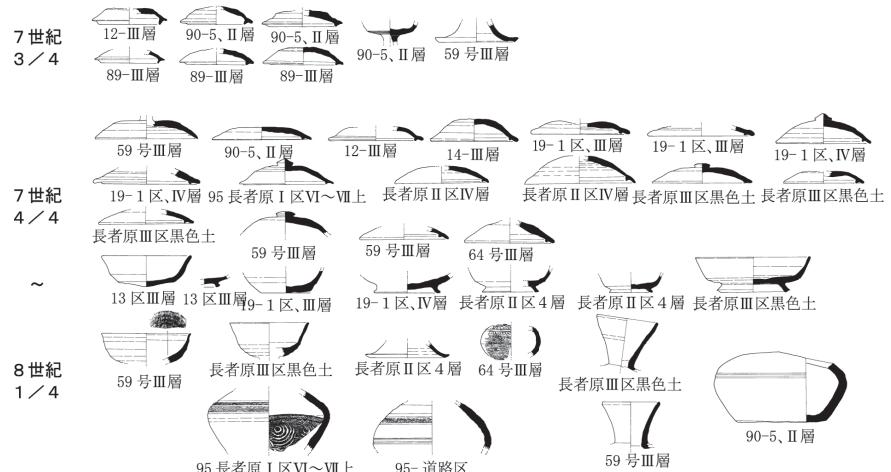
推測が導き出せそうだ。

ここでクローズアップさ

れてくるのが「神籠石の築城年代」を議論した渡辺正



第5図 石製表飾出土古墳を囲繞する古代山城ライン



第6図 鞠智城築城期の土器（調査区出土土器）

(熊本県教育委員会 2013『鞠智城跡』所由の第407図より抜出転載)

気の説（渡辺 1988）。齊明天皇 4 年是歳条の、次の記録にまつわる議論だった。

「(前略)出雲国言。於北海濱魚死而積。厚三尺許。其大如鮎。雀喙針鱗。鱗長數寸。俗曰、雀入於海化而為魚。名曰雀魚。(或本云、至庚申年七月、百濟遣使奏言、大唐・新羅并力伐我。既以義慈王・王后・太子。為虜而去。由是、國家以兵士甲卒陣西北畔、繕修城柵断塞山川之兆也。) (後略) (文中の傍点は筆者。以下同じ)」。

渡辺は、この中で、「或本曰」以下の補註文の中にある「以兵士甲卒陣西北畔」と「繕修城柵断塞山川」に着目した。そして前文中の「陣西北畔」を、「倭国内の西部の北、すなわち現在の九州北部」を指すとし、後の「繕修城柵断塞山川」を「山川を断塞して城柵を築城した」と読んだのだった。また、百濟の敗退を「百濟遣史」が奏上したのは、「庚申年 7 月」で、660（齊明天皇 6）年 7 月のこととした。そして、「やはり、神籠石の築城は、百濟滅亡（王、王后、太子の洛陽への拉致）直後の、唐・新羅連合軍のわが国への侵犯を予想しての防備で、齊明 7 年の築城ということではないであろうか」と、661 年築城を説いたのだった⁽⁷⁾。この渡辺説に従えば、石製表飾出土古墳圍繞ラインの構築は、661 年ということとなる。それは、磐井の乱終結後、ヤマト王権の中で 133 年間語り継がれてきた、未だ生々しい記憶、内憂に対処するためのものだったことになる。そして、鞠智城もまた同様の目的で築城されたものであろうと推測することができる⁽⁸⁾。

4. 鞠智城築城の背景

鞠智城築城は、他の無記載山城と同様に、内憂への対応と前記した。そこで、鞠智城築城の背景を考えるために、その内憂を生じさせた 6 世紀代の情勢がどんなものだったのか、についてもう少し突っ込んで見てみたい。

528 年、繼体天皇 22 年冬 11 月に、物部麿鹿火のヤマト王権軍と磐井軍とが「筑紫御井郡」で戦闘を行い、「遂斬磐井」で、磐井の乱は終結した。527 年 6 月に乱を起こして 1 年半後の結末だった。これによって、「磐井を盟主とする筑紫連合政権の崩壊」（小田 1991）が起こったわけだが、終結後も筑紫連合政権の中核を握っていた筑紫君の系統は維持された、と考えられている（吉田 1975）。それは、次のような記事からだ。

まず『日本書紀』繼体天皇 22 年 12 月条に「筑紫君葛子、恐坐父誅、献糟屋屯倉、求贖死罪。」とあるように、筑紫君を継承した葛子は、連座を恐れ、糟屋屯倉を献上して、死罪を免ぜられたらしい。次に、554 年、欽明天皇 15 年冬 12 月条にも、筑紫国造の記事がある。それは、百濟の王子であった「余昌」が新羅に囲まれた際に、「能射人筑紫国造」が弓を射て、「余昌」を助け出したという記事で、筑紫国造が継承されていることを示す記事である。また、556 年、欽明天皇 17 年春正月条にも「別遣筑紫火君」とあることからも、筑紫君の系統は、脈々と継承されていったことは明らかだ。

一方、筑紫君と火（肥）君との関係がその後も維持されていたことも、知られている（小田 1970）。それは、556 年、欽明天皇 17 年春正月条の記事にある「別遣筑紫火君（百濟本記云。筑紫君兒。火中君弟。）」だ。補註として、「百濟本記」から、筑紫火君が筑紫君の子で、火中君の弟であることが引用されている。乱終結後の 33 年後においても、依然として両国の君同士が姻戚関係にあったことを示すものである。

また、前記「能射人筑紫国造」が「余昌」を救出した記事が欽明天皇 15 年冬 12 月条にあることは、筑紫君が軍事的にも高い能力を備えていたことを示すものであった。さらに、佐藤は、「(前略)『日本書紀』欽明 17 年（556）正月条には、百濟王子恵を本国に護送するために阿倍臣・佐伯連・播磨直らと筑紫の「舟師」（ふないくさ、水軍）を派遣したことに関連して、（中略）火君関係者が軍事的にも活躍した様子がうかがえる」とも述べた（佐藤 2014）。

筆者は、このように、乱の終結後、筑紫連合政権の基盤が揺るいだことは間違いないとしても、それを構成していた筑紫君と火（肥）君とがお互いに系統を存続させつつ、さらには姻戚関係という強い結び付きを保持してきたことに着目したい。また、筑紫君と火（肥）君が乱終結後に軍事力を減退させることなく、30 年以上も依然として強力な軍事力⁽⁹⁾を所持しつづけてきたことにも着目したい。

つまり、ヤマト王権にとっては、終結後すぐに「糟屋屯倉」を得て、533年、安閑天皇2年5月に「筑紫穂波屯倉・鎌屯倉」「豊國膝崎屯倉・桑原屯倉」「火国春日部屯倉」などを置いて、九州北部の政治的な掌握を行ったとしても、依然として筑紫君と火（肥）君の存在を無視することはできなかったのではないだろうか。この点については、板楠和子が行った議論は重要だ。それは「九州地方は大和政権からみて（中略）、6世紀初頭の筑紫国造磐井の乱以来、半島勢力と結びついての叛乱や内乱を警戒しなければならない地域であった」（板楠2012）というもの。もっとも的確な議論だと評価し、強く支持したい。

鞠智城は、無記載山城の一つとして、ヤマト王権の内憂への対応として築城されたものと考えられる。その内憂とは、磐井の乱の構図の「（百濟=）ヤマト王権 VS 筑紫連合政権=新羅」からイメージされた、筑紫国、豊國、火（肥）国の勢力の蜂起の可能性であり、新羅との連携の可能性であり、それらへの警戒心だった。要するに、133年間語り継がれてきた磐井の乱の記憶がトラウマとなって、他の無記載山城とともに鞠智城が築城されたものと考えられはしないだろうか。

5. ヤマト王権の対応策と鞠智城の築城

（1）ヤマト王権の対応策

i. 内憂回避策としての囲繞ラインの構築

583年、『日本書紀』敏達天皇12年是歳条に、「火葦北国造阿利斯登子達率日羅」から聞かされた有事の際の「每於要害之所堅築墨塞矣」が記されている。要害の地に固く「墨塞」（山城）を築くように、との築城の教えた。

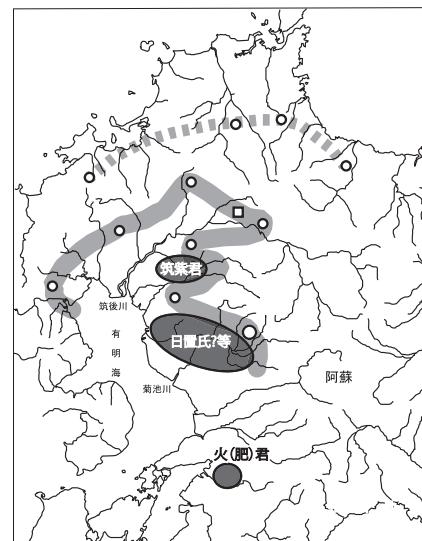
660年、『日本書紀』齊明天皇6年9月条によると、百濟が達率沙弥覺従等を派遣して報告し（或本でいうには、逃れて来て難を告げる）、7月に百濟が亡ぼされたことがヤマト王権側に伝わった、という。また、同10月条では、百濟の佐平鬼室福信が、佐平貴智等を派遣して、救援を願うとともに、王子の余豊璋を還すよう要請してきた、ともされた。この9月から10月にかけての動きの中で、イメージされたのが、新羅の動きに連動して起こるであろう、磐井の乱の構図の再来ではなかつたろうか⁽¹⁰⁾。

ヤマト王権は、日羅のアドバイスを踏まえた防禦体制として、まずは内憂回避策に当たった。それが、筑紫君と火（肥）君への対応ではなかつただろうか。すなわち、その直接的行動が、朝倉橋広庭宮への遷都と、それを守護し、併せて筑紫君と火（肥）君への牽制のための「墨塞」、すなわち山城の築城だったのではないだろうか。その結果、661年に構築されたのが、石製表飾出土古墳囲繞ラインで、筑紫君や火（肥）君、日置氏等の菊池川流域の豪族への威嚇、牽制だったろうと想像される（第7図）。また、同時に、雷山神籠石から御所ヶ谷神籠石までの、外郭ラインも構築された可能性も高い（第7図）。

こうした石製表飾出土古墳囲繞ラインの構築が功を奏したのかどうかは定かではないが、ヤマト王権の内憂は杞憂と化した。これは、672年、『日本書紀』天智天皇10年11月条の記録から窺える。唐から帰国した「沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐四人」の記録で、その中に「筑紫君薩野馬」がいたことは、筑紫君がヤマト王権の百濟救援軍に参画していたことを示す史料である。内憂が現実にはならなかつたことを直接的に示す歴史的事実である。

ii. 外患対応策としての西日本防禦ラインの構築

齐明天皇は、朝倉橋広庭宮に遷都した（『日本書紀』齐明天皇7年5月9日条）が、朝倉宮で没した（同7月24日条）。その後の



第7図 661年の防禦概念図

経緯も『日本書紀』に記されており、それによると、8月1日に中大兄皇子が遺体を磐瀬宮に移した後、10月23日に海路で難波へ移送し、11月7日～12月9日に殯を行った。そして、こうした中でも事態は確実

第2表 百済救援関係年譜

年	月	派遣將軍等	救援内容
661(齊明7)	8	阿曇比羅夫・河辺百枝・阿倍引田比羅夫・物部連熊・守君大石	兵器・物資提供 兵杖・五穀
	9		内部調整等 中大兄皇子・長津宮(博多大津)へ移
		狹井檜榔・秦造田来津	内部調整等 織冠を百済王子余豐璋に授
662(天智元)	1		兵士派遣 兵士5000名
	3		武器: 矢10万隻、物資: 糸500斤・綿1000斤・布1000反・韋100張・稻種3000斛
	5	阿曇比羅夫	物資提供 布300反
			余豐璋衛送 船170艘
663(天智2)	3	上毛野君稚子・巨勢神前譯語・三輪君根麻呂・阿倍引田比羅夫・大宅鎌柄	百済側動向 余豐璋が王位
	6	上毛野君稚子等	救援準備 兵器の修繕、船舶の具備、兵糧の確保
			兵士派遣・戦闘 兵士27,000名で率いて、新羅を打
	8	廬原君臣	戦闘 新羅の沙鼻・岐奴江の2城を奪取
			百済側動向 鬼室福信、謀反の咎で斬首
			兵士派遣 兵士10,000名を率いて、渡海
			戦闘 白村江で敗戦

に進行していく（第2表）。

663年、天智天皇2年8月28日、倭・百済軍と唐・新羅軍は、白村江で戦闘を交えた。その結果は、倭・百済軍の敗退で、この敗退後に築かれていたのが、高安城、屋嶋城、長門城、大野城、基肄城、金田城で、西日本防禦ラインの構築だった。

小田富士雄は、西日本防禦ラインの構築を次のように整理した。まず、「外敵襲来時の最前線対馬・壱岐に防と烽を置き、大宰府侵攻に備えた水城の築堤」から始まった。その翌年からは、「水城とともに大宰府都城を構成する大野・基肄2城」と、瀬戸内海の入り口の長門城に着手。そして、「667年の第2次防衛線」といわれている高安城・屋嶋城の築城段階に組み込まれるかたちで、「最前線に位置する対馬・金田城」がそれら共に築城された（小田2012）。

この小田の整理からすれば、西日本防禦ラインの構築は、大きく2つの段階で進んでいたようである。第1段階は、「外敵襲来時の最前線」の整備（対馬・壱岐の烽）、瀬戸内海進攻での第一次防衛拠点（長門城）、「大宰府侵攻に備えた」「大宰府都城」の整備（水城・大野城・基肄城）。第2段階は、「外敵襲来時の最前線」の機能強化（金田城）、畿内間近の播磨灘目前の防衛拠点（屋嶋城）、倭の直接的な防禦（高安城）の「第2次防衛線」の整備。まさに、この過程が、ヤマト王権による外患対応策だったと考えられる。

（2）鞠智城とその築城意義

i. 鞠智城跡の発掘成果の概要

鞠智城跡については、これまでの発掘調査によって、全体像が次第に明らかになってきた。その城域は、『鞠智城跡II』『同論考編1』（熊本県教育委員会2012、2014。引用は2書に依り、後書の場合のみ明示）によると、「南を菊池市木野堀切の集落の後背にそびえる阿蘇溶結凝灰岩の崖線から北西方向に延びる丘陵の尾根、西を初田川流域の小盆地、北から東にかけてを支流米原川の浸食谷で区切る東西幅約1.6km、南北幅約1.3kmの範囲」（狭域説）に及んでいると考えられている。また、



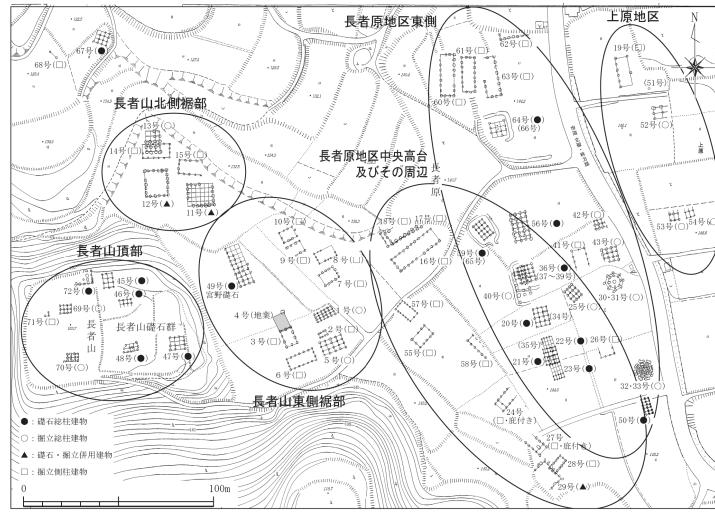
第8図 鞠智城跡全体図
(熊本県教育委員会2012『鞠智城跡II』より一部加工して転載)

その中の「南の崖線の中途から北に折れ、池ノ尾の谷部を渡り、西を「灰塚」、「涼みヶ御所」、「佐官どん」といった地名が残る北に延びる丘陵の尾根、東を台地縁の崖線で区画された周長 3.5km、面積 55ha、標高 90～171 m の範囲」(第8図)が「内城地区」である。

建物跡では、掘立柱建物跡（側柱・総柱）、礎石建物跡、掘立柱併用礎石建物跡が合せて 72 棟も確認され（第9図）、その研究によって鞠智城 I 期から鞠智城 V 期までの建物の変遷が明らかにされた。これは本論にとっても実に意義深いことで、まさに築城当初の建物配置が明らかにされたのだった。それによると、I 期の建物（第10図）は、鞠智城跡の中心域、長者原の中央部にあった。どうも、建築上、立地環境的に最適な場所が選ばれたようだ（第11図）。また、その位置は、鞠智城跡の中でも重要なエリアの一つである貯水池の池頭部分にあたっており、谷筋を降りる際に、比較的緩やかなスロープが使える所でもあった（第11図）。例えば、谷頭から始まる池への誘導路、それは確認されておらず、あくまでも推定だが、の先には、途次で右に折れた所に木組み遺構（水汲み場）があり、終点近くには、総柱の礎石建物が配置されていたと見えなくはない（第11図）。貯水池の利用からも、その建物位置は、極めて利便性の高いところだったようだ。

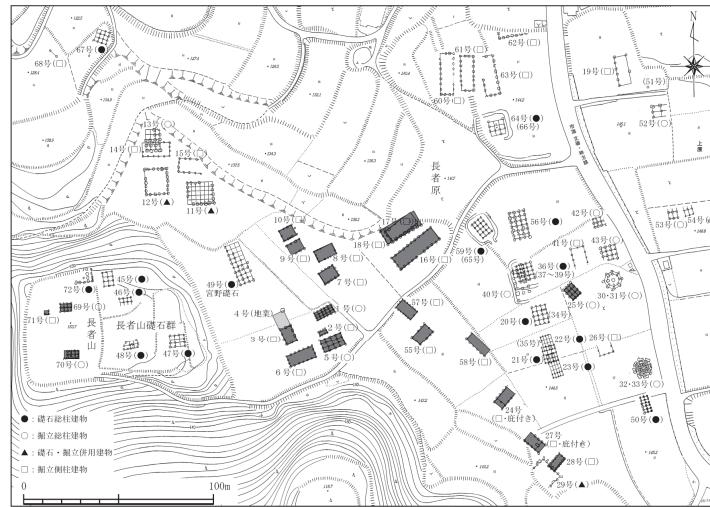
建物跡のある長者原の北西側の谷部では、「古代山城では現在のところ唯一の事例となる 5300m²の面積」の貯水池跡が見つかっている。この貯水池跡については、西住欣一郎によって、「貯木場跡、木組遺構がある貯水池跡の中

心部は、①層の年代から 7 世紀第 3 四半期～8 世紀第 4 四半期にかけて利用されていると考えることができる」との見解が出された（西住 2014）。また、池尻部にあっては、「池中央部の機能が停止した後でも、



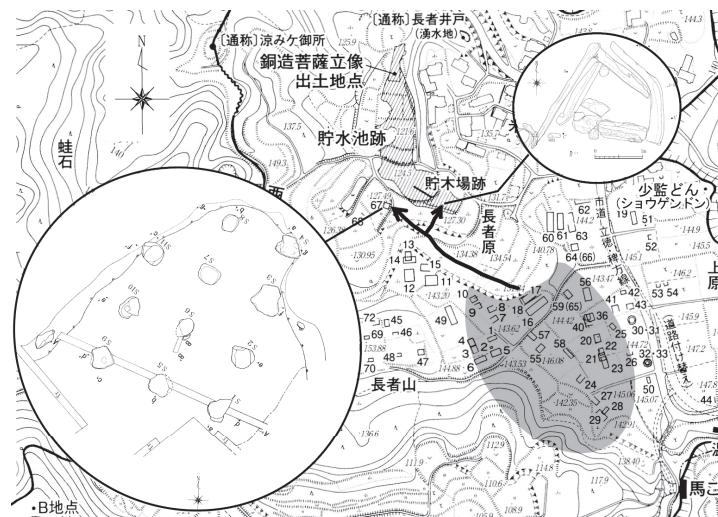
第9図 鞠智城跡建物跡分布図

(熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡II』より転載)



第10図 鞠智城I期建物跡分布

(熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡II』より転載)



第11図 鞠智城I期建物群の選地特性

池の末端部では貯めた水の排水が必要であり、池として機能させるために10世紀初め頃まで維持管理作業を行ったと考えられる」との認識を示した(西住2014)。貯水池の維持管理は、城の管理の中でも、重要な位置を占めていた業務であり、それが中心部では少なくとも8世紀第4四半期までは継続されていたことは、建物跡の変遷も含め、重要な基礎データとなる。併せて、「秦人忍□五斗」銘の付札木簡や銅造菩薩立像は、「当時の社会構造を物語る貴重な発見」と評価されている。

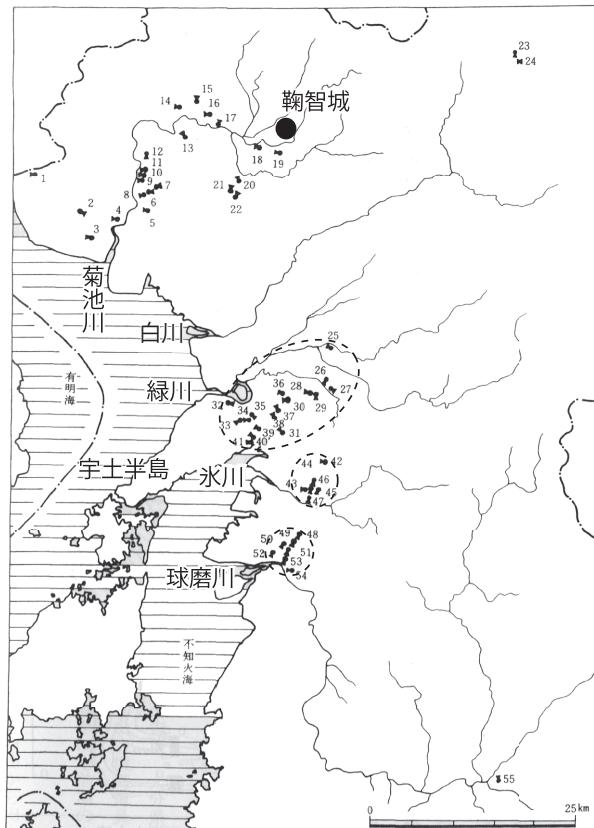
城壁を含む外郭線についても、多くの知見が得られた。その遺構は、「南側と西側には、土壘的景観を色濃く残す南側、西側土壘線」と、「城域の南東隅、南中央、南西隅に」、それぞれ所在する「深迫門跡、堀切門跡、池ノ尾門跡」である。この外郭線については、矢野裕介が「土壘の構築」を中心に研究を行った。その結果、土壘の構築では、「大野城跡との類似性が強く、他の古代山城とは一線を画すること」ができるとの結論に達したもの、「大野城跡における土壘の盛土と比べるとやや粗雑な傾向」から「大野城、基肄城の築城より遅れた」築城時期が想定されたとした。今後は、「版築によらない盛土が一部に想定される状況は、天智6(667)年築城の金田城跡、屋嶋城跡との関連が想起される」こともあり、「時期差なのか、あるいは地域差なのか、大宰府周辺から離れた肥後の地にある鞠智城跡の立地要件も踏まえて判断する必要」性が強調されている(矢野2014)。

ii. 鞠智城築城が意味すること

菊池川流域以南の火(肥)国には、複数の有力な豪族がいたらしい(第12図)。特に、氷川流域が本拠と考えられている火(肥)君は、磐井の乱終結後も、婚姻関係で筑紫君と深くつながり、筑紫君とともに強力な軍事力を誇っていたようだ(佐藤2014)。また、鞠智城がある菊池川流域には、弥生時代のうてな遺跡や方保田東原遺跡などの大規模な環濠集落や、古墳時代のフタツカサン古墳(全長約60m)、チブサン古墳(全長約45m)、岩原双子塚古墳(全長約107m)、江田船山古墳(全長約46m)等の前方後円墳などが集中し(第12図)、火(肥)君にも十分に対抗し得る勢力が権勢を奮ってきたと言っても過言ではない。この他にも、「葦北国造」を示唆する球磨川河口の前方後円墳群、宇土半島基部から緑川流域の前方後円墳群などは、十分な存在感がある(第12図)。とするならば、ヤマト王権が鞠智城築城で想定した対象は、日置氏を含む菊池川流域の諸豪族や、火(肥)君等と多数であり、地理的範囲で見れば、菊池川以南という広大な地域だったことになる(第12図)。ここが、ピンポイントかつ、ラインによる内憂対応の他の無記載山城との決定的な違いだ。

それは、鞠智城の規模や地形、造りの特徴にも表れている。

鞠智城の外周は、3.5kmである。これは、他の古代山城と比べてみても、大きな規模である(第3表)。例えば、大宰府の本拠地にある大野城の6.5kmは、当然の大きさだろうし、基肄城の3.9kmも他を凌駕している。鞠智城は、大野城ほどはないものの、基肄城や城山に匹敵し、他の古代山城よ



第12図 熊本県内の前方後円墳の分布
(富樫・平山・高木 1978 から作成)

りは明らかに長い外周だった。しかも、他の古代山城では見られない、広い平坦地を擁する、低平な丘陵に築かれていたこと（小田 1993）も見逃せない特徴だった。

次に、鞠智城 I 期の建物群の配置（第 10 図）を見ると、西端建物群、中央建物群、東端建物群の、3 グループがあったことが分かる（第 13 図）。西端建物群は、長者山にあり、小型の総柱建物が中心だった。中央建物群は、小型の側柱建物が中心で、小型の総柱建物もあった。建物主軸では、N20°～50°W の建物とそれに直交する 2 種の建物があった。東端建物群は、北端の大型の側柱建物がメインだ。これに小型の側柱建物と総柱建物が加わり、建物主軸でも 2 種の建物があった。

こう見てみると、建物群の配置や構造・主軸が異なる建物が組み合わされることによって、複合的な構成の建物群だったことが分かるだろう。これは、一つの建物群が異なる役割・機能の数種の建物によって構成されていたこと、東端の建物群がメインとしつつも、それぞれのグループごとに役割・機能を違えた複雑な仕組みがあったことを示しているのではないだろうか。

百済滅亡に触発されてヤマト王権がまず執った行動は、前記したように、朝倉橋広庭宮への遷都準備であり、内憂への対応だったと想像される。そのためには、齐明天皇の西行きまでに、朝倉橋広庭宮を完成させ、そこを防禦するための古代山城のラインを整備する必要があった。その動向の中で、菊池川中流域の一角、菊鹿盆地の最奥部で、菊池川流域で最も新しい前方後円墳とされる（高木 2002）、石製表飾出土古墳のフタツカサン古墳や木柑子高塚古墳がある花房台地が直接を望める土地を選地したのではなかったろうか。

6. おわりに—「鞠智城」後論—

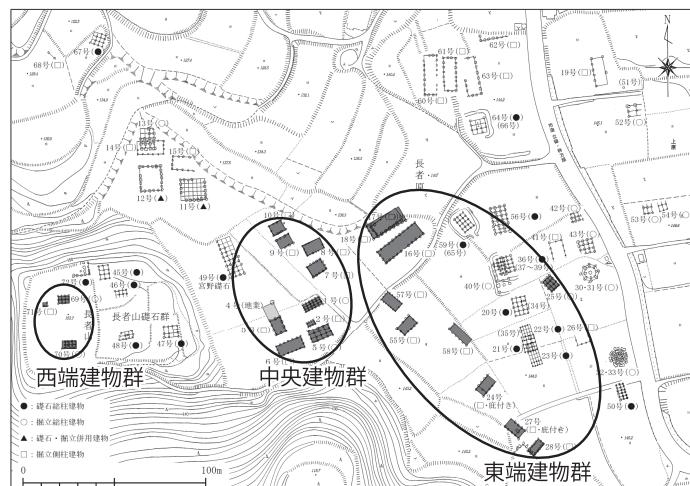
ヤマト王権が予想した内憂は、筑紫君の百済救援軍への参画によって、解消されることになった。ところが、鞠智城の存在感は、減退することなく、その後も続いていくことになった。そのことを示す史料が、『続日本紀』文武天皇 2 年 5 月 25 日条の「令大宰府繕治（中略）鞠智三城。」の繕治記事であった。それは、698 年のこと、661 年、齐明天皇 7 年に築城されたと推測した鞠智城は、37 年間維持管理されてきたことになる。そしてその間の 37 年間が鞠智城 I 期である（熊本県教育委員会 2012）。

この時期は、建物跡群で「2 時期の細分が可能」とされている（熊本県教育委員会 2012）。このことから、37 年間に一度の改築が行われていたことがわかる。実証実験の例を知らないので、掘立柱建物の耐用年数がどれくらいなのかは判然としないのだが、掘立柱建物の伊勢神宮の式年遷宮が 20 年周期であることから、

第 3 表 古代山城外周比較

種別	国	古代山城	外周(km)
		鞠智城	3.5
無記載	火	おつぼ山神籠石	1.87
		帶隈山神籠石	2.4
	筑紫	阿志岐山城	2.5k
		杷木神籠石	2.25
		高良山神籠石	2.8
		女山神籠石	3.0
	豊	雷山神籠石	2.3
		鹿毛馬神籠石	2.2
		唐原神籠石	2.5k
記載	対馬	御所ヶ谷神籠石	2.6～3.0
	筑紫	金田城	2.8
	基肄城	大野城	6.5
無記載	周防	基肄城	3.9
	伊予	石城山神籠石	2.35
	讃岐	永納山	2.55
	吉備	城山	4.0
	播磨	鬼ノ城	2.8
		大廻・小廻山	3.0
		城ノ山城	？

* 太線囲みは、外周 3.5km 以上



概ね 20 年前後とされる認識が一般的ではなかろうか。そうだとすれば、661 年後の 20 年後の 681 年頃に改築が行われ、繕治は、その 17 年後ということになる。タイミングとしても最適な繕治だったと想像されるが、それ以上に、改築の事実は、内憂対応の役割として築城された無記載山城の一つだった鞠智城が、白村江敗戦以後も、確実に維持管理されてきたことの傍証でもある。しかも、そこには、改築による機能強化の側面も考古学的に跡付けられる。

熊本県教育委員会の発掘調査で、16 号～18 号建物跡の大型の掘立柱建物跡 3 棟（第 14 図）が東端建物群の最奥で見つかった。これらは、その規模（16 号が 3 間 × 10 間、17 号が 3 間 × 7 間以上、18 号が 3 間 × 8 間以上）と一番奥まった場所であったことから、重要建物であったことが推定できる。その 17 号と 18 号で切り合い（建て替え）関係が確認されたのである（熊本県教育委員会 2012）。そして、平行して建築されていた 16 号と 17 号が同時に存在していた可能性が高く、また切り合いの関係から、18 号を改築して 17 号が建てられたことが分かった。その結果、1 棟（18 号建物跡）から 2 棟（16 号・17 号建物跡）への改築・増設が確認され、機能強化が図られたことが分かったのである。

実は鞠智城が改築されたと推定した 681 年は、壬申の乱（672 年）後、律令国家への歩みが加速し始めた頃だったようだ。例えば、飛鳥淨御原令や大宝律令の制定への具体的な動きが始まったのは、この年（『日本書紀』天武天皇 10 年 2 月 25 日条「天皇々后（中略）、詔之曰「朕今更欲定律令改法式、故俱修是事。然頗就是務公事有關、分人應行。」」）。また、後の『日本書紀』につながる、「帝紀及上古諸事」が編纂されたのもこの年だった（同 3 月 17 日条「天皇御于大極殿、以詔川嶋皇子・忍壁皇子（中略）、令記定帝紀及上古諸事。大嶋・子首、親執筆以錄焉」）。いわば未だ途次であった律令国家化が強力に図られていった時期だったと想像できる。ここに鞠智城で見られた、重要建物の 1 棟から 2 棟への増設、すなわち機能強化の背景が分かりそうである。

鞠智城 I 期は、白村江敗戦を受けて歩み始めた律令国家への体制整備の時期だった。その間、飛鳥淨御原令の制定の 689 年前後に、

- ・肥後と肥前の分割などの国の分割（『日本書紀』天武天皇 12（683）年 12 月 13 日条「遣諸王五位伊勢王・（中略）・工匠者等、巡行天下而限分諸国之境堺。然、是年不堪限分。」、天武天皇 13 年 10 月 3 日条「遣伊勢王等、定諸国堺。」）
- ・戸籍の整備（同持統天皇 4（690）年 9 月 1 日条「詔諸国司等曰、凡造戸籍者、依戸令也。」）
- ・班田收受法の施行（同持統天皇 6 年 9 月 9 日条「遣班田大夫等於四畿内。」）

などの地方制度や統治制度の整備が進められていた。九州での、これらの整備が大宰府を中心に行われただらうことは、「九州の地理的歴史的特殊性のため、九州を統括する特別の地方行政機関として『大宰府』が設置されたのである」という、板楠和子の議論からも良く理解できる。それは「とくに 7 世紀後半以降（中略）、中央集権的な律令国家の完成を目指す大和政権にとって、九州地域の豪族達が支配する土地と人民を直接把握し、『国』の境を定めて『評（こおり）』を分割し、新税制などを施行していくことは、他の地域よりも一層困難と考えられていた」（板楠 2012）ためだった。実は、そういう土地柄だからこそ、鞠智城は重視されたのではな

いか。なぜならば、火（肥）国の中でも後の肥後国にあたる地域は、大宰府からは僻遠の土地だったからだ。

白村江敗戦後、九州でも律令制への体制整備は、確実に進められていったであろう。鞠智城は、筑紫国以南の地域の体制整備を推進するにおいて、極めて重要な施設として存在感を持っていたのではないだろうか。だからこそ大宰府の監督下で、機能強化を講じながら、維持管理され続けたのではないだろうか、と思われてならない。それは、政治的な動きも含めた「軍略的な意味」を持たせた、ヤマト王権の鞠智城觀を反映したもので、「軍略的な意味」をも加味していた大野城や基肄城とともに、繕治されたのではなかつたろうか。

そして今、白村江の戦い直後の防衛というよりも、国内事情で、律令国家の中での九州の掌握を視野に入れた築造であり、改修であったとした、岡田茂弘の議論（岡田 2005）を改めて評価してもよいのではないだろうか。

以上「鞠智城」後論として記してきたことは、鞠智城の歴史的意義を改めて問い合わせる予察である。十分に検討を要する問題であり、新たな議論を創出する課題でもあるといえよう。鞠智城Ⅰ期に一度の建て替えが行われた事実を考古学的にどう跡付けし、歴史学的にどう評価するかは、今、鞠智城跡の調査研究に当たる研究者等の責務であろうと考える。と同時に、繕治の意味を新たな「役割論」として問い合わせることも必要なことではなかろうか。稿を改めて、議論したい。

【謝辞】

本稿を草するにあたり、温故創生館の矢野裕介氏、木村龍生氏、能登原孝道氏には、文献検索に当たって、丁寧な対処をしていただいた。記して謝意を表したい。

最後に、装飾古墳や鞠智城跡に止まらず、多くの分野で御指導を頂いてきた、古閑三博先生が鬼籍に入られた。これまでの御学恩に心より感謝し、本論を御靈前に献呈させていただきたい。合掌。

＜註＞

- (1) 鏡山猛のいう「軍略的な意味」が具体的に何を示しているのかが分からない。ただし、食料や兵器などの備蓄と、有事の際の大宰府への補給という兵站基地を想定している、というのが大方の認識だろう。この点については、後述するが、政治的な動きも軍略の意の中に含まれるとも評価したい。
- (2) 木村龍生の議論の特徴は、「地形的要因、地理的条件、前時代からの流れ、古代城柵との比較などの様々な点から検討して、鞠智城が熊襲・隼人対策のために築城、繕治された城ではない」と、cの観点の可能性を否定したところである。また、aの観点の可能性を否定したことも同様である。
- (3) 能登原孝道のこの議論は、8世紀前半、「基肄城内に非常の時などのために稻穀が貯蔵されており、それが大宰府によって管理されていた」との板楠和子の議論（板楠2012）を受けてのもので、同様の機能や仕組みが鞠智城にあった可能性を想定したものだった。
- (4) 甲元眞之が「朝倉宮行宮構想」論の根拠とした、政庁的な遺構配置（60～63号掘立柱建物跡）については、『鞠智城跡Ⅱ』（熊本県教育委員会2012）の中で、菊池城跡第Ⅱ期に位置付けられた。従って、現時点では、甲元の議論は、根拠を失っている。
- (5) 長門城の所在については、現時点で不明である。
- (6) 板楠和子によると「大宰府の成立については当時の状況からみて、やはり白村江の敗戦以後と考えられている。文献史料から見ると天智10（671）年条には、対馬国司が唐使の来朝を「筑紫大宰府」に報じたあり」、これが「大宰府の史料的初見」だという（板楠2012）。従って、665年段階で大宰府があったかどうかは、判然としないが、ここでは、大宰府としておく。
- (7) これに対しては、八木充から、「以兵士甲卒陣西北畔」も「繕修城柵断塞山川」も「百濟遺史」が奏上したものであって、すべて百濟での動きだとの趣旨の批判がなされることになった（八木

2008）。この論争は、その後深まることなく、今まで続いているのが実状であり、渡辺説が否定されたものではない。文中の「由是」と述べたのが「百濟遣史」なのか、『日本書紀』の撰者のかは、微妙な問題である。筆者は、『日本書紀』の撰者が「由是」と述べたものと解して、渡辺説を支持するとの立場をとっておきたい。

- (8) 確かに坂本經堯の議論に「有明海方面より侵入した外敵に備へ、同方面の異変を防烽の制によって大宰府に中継する」とある。また乙益重隆、小田富士雄、西谷正、濱田耕策、笹山晴生、佐藤信も同様の議論を行った。果たして、唐・新羅が敵の懷深く入り込むことを戦略として選択しただろうか。少なくともその戦略が成立するためには、九州の豪族たちとの連携が不可欠となるはずだ。従って、筆者は、こうした連携を未然に予想した内憂対策と認識した。
- (9) 平野邦雄は、この軍事力について次のように指摘した。「肥君自身もこのような状態のもとで、軍事化したのは当然のなりゆきであったろう。欽明朝に、「筑紫火君」が（中略）その勢力の大きさと朝廷の軍事力の一翼を担った状態」（平野1973）と。
- (10) 本文の「ヤマト王権の中で133年間語り継がれてきた、未だ記憶に生々しい磐井の乱への記憶」に関連して、岡山県鬼ノ城を取り上げる。この城については、佐藤信が「鞠智城の立地は、有明海に直接面するわけではなく、やや奥まっているともみられるが、菊池川流域の有力な生産地を背後から守るという面では、例えば瀬戸内海からやや離れて吉備の有力生産地を背後から守る性格をもつ古代朝鮮式山城の鬼城山（岡山県総社市）と似ているといえるのではないだろうか」（佐藤2014）と述べたように、鞠智城と同じように、吉備氏との関連で理解することができるかもしれない。
- 463年、雄略天皇7年、吉備氏の乱が起きた。吉備田狭が新羅と通じて起こした反乱とされている（門脇1922）。この乱が新羅との関係の中で勃発した事実をみれば、磐井の乱にも相通じるものがある。鞠智城に良く似た鬼ノ城の役割も、吉備氏の乱への記憶を背景にしている可能性もあるのではないか。また、このことは、大廻小廻山城や茨城、常城でも言えなくはないだろう。

＜引用・参考文献＞

- 板楠和子 2012 「「肥後国」と「鞠智城」」『鞠智城跡Ⅱ—鞠智城跡第8～32次調査報告—』 熊本県教育委員会 岩波書店 1965 『日本古典文学大系』 68 『日本書紀』（下）
- 岡田茂弘 2005 「多賀城と古代城柵、保存・活用の現況」『古代山城鞠智城を考える 鞠智城跡国史跡指定記念シンポジウム報告書』熊本日日新聞情報文化センター・熊本県立歴史公園鞠智城・温故創生館
- 岡田茂弘 2010 「古代山城としての鞠智城」『古代山城 鞠智城を考える—2009年東京シンポジウムの記録』山川出版社
- 小田富士雄 1970 「磐井の反乱」『古代の日本3・九州』角川書店（小田富士雄編1985『石人石馬』学生社に載録）
- 小田富士雄 1991 「磐井の乱の歴史的位置」『古代を考える 磐井の乱』吉川弘文館
- 小田富士雄 1993 「熊本県・鞠智城をめぐる諸問題」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会編
- 小田富士雄 2012 「鞠智城の創建をめぐる検討」『鞠智城跡Ⅱ—鞠智城跡第8～32次調査報告—』 熊本県教育委員会
- 小田富士雄編 1985 a 『北九州瀬戸内の古代山城』 日本城郭史研究叢書第10巻 新人物往来社
- 小田富士雄編 1985 b 『西日本古代山城の研究』 日本城郭史研究叢書第13巻 新人物往来社
- 乙益重隆 1985 「鞠智城（菊池城）」『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書第10巻 名著出版
- 鏡山 猛 1961 「西日本に於ける上代の築城」『日本城郭全集1 総論・上代中世の城編』日本城郭協会
- 鏡山 猛 1967 「1 古代の城塞 二 西日本」『日本の考古学』VII歴史時代（下）河出書房新社

- 鏡山 猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房
- 門脇禎二 1992『吉備氏の古代史—王国の盛衰—』日本放送出版協会
- 木村龍生 2014「鞠智城の役割に関する—考察—熊襲・隼人対策説への反論—」『鞠智城跡II—論考編1—』熊本県教育委員会
- 熊本県教育委員会 1983『鞠智城跡』
- 熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡II』
- 熊本県教育委員会 2014『鞠智城跡II—論考編1—』
- 甲元真之 2006「鞠智城についての一考察」『肥後考古』第14号 肥後考古学会
- 国史大系刊行会 1898「积日本紀」『国史大系』7 経済雑誌社
- 坂本經堯 1937「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就いて」『地歴研究』第10編第5号 地歴研究会
- 坂本經堯 1958「鞠智城跡を米原に求めて」『熊本の歴史』熊本日日新聞社
- 佐藤 信 2011「古代鞠智城と東アジア」『古代山城鞠智城を考えるII 東アジアの中の古代鞠智城』熊本県教育委員会
- 佐藤 信 2014「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡II—論考編1—』熊本県教育委員会
- 笹山晴生 2011「日本古代史と鞠智城」『古代山城鞠智城を考えるII 東アジアの中の古代鞠智城』熊本県教育委員会
- 笹山晴生監修 2010『古代山城 鞠智城を考える—2009年東京シンポジウムの記録—』山川出版社
- 島津義昭「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館
- 高木正文2002「菊池川流域の装飾古墳」『東アジアと江田舟山古墳』雄山閣
- 富樫卯三郎・平山修一・高木恭二1978『向野田古墳』宇土市教育委員会
- 富田紘一 1979「熊本県〔菊池地区〕 鞠智城 119」磯村幸男・阿蘇品保夫・森下功・三木靖編『日本城郭史大系 18福岡・熊本・鹿児島』新人物往来社
- 長 洋一 1991「鞠智城について」『都府楼』第12号 古都大宰府保存協会
- 西住欣一郎 1999「発掘からみた鞠智城」『先史学・考古学論究III』龍田考古会
- 西住欣一郎 2014「鞠智城跡貯水池跡について」『鞠智城跡II—論考編1—』熊本県教育委員会
- 西谷 正 2007「鞠智城と菊池川文化」『菊池川流域古代文化研究会だより』第19号 菊池川古代文化研究会
- 西谷 正 2011「朝鮮半島から見た鞠智城」『古代山城鞠智城を考えるII 東アジアの中の古代鞠智城』熊本県・熊本県教育委員会
- 能登原孝道 2014「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」『鞠智城跡II—論考編1—』熊本県教育委員会
- 濱田耕策 2009「朝鮮古代史からみた鞠智城—白村江の敗戦から隼人・南島と新羅海賊の対策へ—」『古代山城 鞠智城を考える—2009年東京シンポジウムの記録—』山川出版社
- 平野邦雄 1973「第5節「筑紫」の豪族—筑紫君—」「第8節「肥」の豪族」「九州における古代豪族と大陸」「九州文化論集1・古代アジアと九州」平凡社（小田富士雄編1985『石人石馬』学生社に載録）
- 向井一雄 1991「西日本の古代山城遺跡—類型化と編年についての試論—」『古代学研究』125 古代学研究会
- 森貞次郎 1956「筑後国風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」『考古学雑誌』41-3 日本考古学会
- 八木 充 2008「百濟滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』7月号 吉川弘文館
- 矢野裕介 2014「鞠智城跡・土壘の構築とその特徴」『鞠智城跡II—論考編1—』熊本県教育委員会
- 山崎直方・佐藤傳藏編著 1911『大日本地誌』巻8
- 山田宗睦訳 1992『原本現代訳(41)『日本書紀』(下)』教育社
- 吉田 彰 1985「筑紫君磐井の反乱」「古代国家の形成」『岩波講座・日本歴史2(古代2)』岩波書店（小田富士雄編1985『石人石馬』学生社に載録）
- 渡辺正気 1988「神籠石の築城年代」『考古学叢考』中巻 吉川弘文館